

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Nittayaporn Prompanya
論文題目	Creation of Modern Northern Thai Chronicles and Politics of Historiography (近代北タイ年代記の生成と歴史叙述をめぐる政治)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、近代シヤム (タイ) の傑出した知識人であり官僚であったプラヤー・プラチャーキットコーラチャック (本名チェム、以下チェムと略記) (1864～1907年) の著作——「トン・タムナーン・ウタイ」(「ウタイ年代記の起源」) (1889～1890年)、『ワチラヤーン』誌に連載された4点の北部地方に関する年代記 (1898～1899年)、『ポンサーワダーン・ヨーノック』 (『ヨーノック年代記』) (1907年) ——を主たる対象として、19世紀末から20世紀初めにおける歴史の構築と近代国家形成との関係と、20世紀初頭から後半にかけての歴史叙述をめぐる政治という課題を検討する。まずチェムがなぜ、いかに上記著作を執筆、刊行したのかを、チェム自身の体験を踏まえ、同時期に進行した英仏植民地勢力との領土をめぐる争いと国家統合に向けたシヤムの統治改革の文脈において考察し、これらの著作の特徴や意義を検討する。加えてチェムの死後、チェムの著作がいかに歴史研究者や北タイの知識人に受けとめられ、使われてきたのか、チェンマイを中心とする現代政治や社会的背景の中で検討する。</p> <p>第1章では、分析対象となるチェムの著作の概要を紹介する。そして、先行研究がチェムの主著として広く知られる『ポンサーワダーン・ヨーノック』 (1907年) の検討にとどまる一方、本研究ではチェムの北部地方に関する初期の著作に遡り、それぞれの著作の成立の経緯と叙述の特徴を歴史の文脈に照らして分析する意義が説明される。また未公開アーカイブ史料を中心に、本論文が依拠した史料が紹介される。</p> <p>第2章では、全体の背景として、ランナーとして知られる北部地方の地理的条件と歴史を、主に標準的な教科書として知られるサラッサワディー・オーンサクン著 <i>History of Lan Na</i> に依拠しつつ説明する。これは4章以下で示されるチェムの著作の枠組みや叙述の特徴を考察する前提とも位置づけられる。</p> <p>第3章では、チェムの経歴と著作活動が、同時代のメコン上流域をめぐる英・仏・シヤム間の確執に関連づけつつ示される。英語を含む近代教育を受けたチェムは、1880年代半ばチェンマイに赴任して外国人 (イギリス臣民) との係争を扱う「外国裁判所」の業務に就いたのを皮切りに、英領ビルマとの境界域の探査などに従事した後、バンコクに戻り亡くなるまで司法界で活躍した。その傍ら『ワチラヤーン』誌に寄稿するなど執筆活動も行った。</p> <p>第4章では、最初の著作である「トン・タムナーン・ウタイ」の内容と叙述の特徴を</p>			

分析する。この著作は、英領ビルマとの境界域の探査中に執筆されたと考えられ、調査中に収集した現地の情報やイギリス植民地官僚の著作など多様な史料を利用し、紀元前中国やインド・中央アジアに始まり18世紀末に至る長期的時間軸とシャムを超える広範な地理的範囲の中で「ウタイ」（タイ）の人々の歴史を記した。また19世紀初めに書かれた北部地方の年代記と比較し、その叙述の特徴を指摘する。

続いて第5章では、「ポンサーワダーン・ラーオ・チェン」（「ラーオ・チェン年代記」）など、1898年から1899年にかけて『ワチラヤーン』誌上に連載された北部地方に関する年代記4点を、パークナム事件（1893年）に至るフランスとの紛争、および地方の中央集権化に向けたシャムの統治改革期（1892～1899年）という歴史的文脈において検討する。「トン・タムナーン・ウタイ」とも比較し、内容と特徴を考察する。

第6章では、プレーにおけるシャンの反乱（1902年）やフランスによるメコン川西岸地域のルアンパバーン旧領の領有（1904年）などの事件の後、1907年に出版されたチェムの主著『ポンサーワダーン・ヨーノック』を検討する。内容の確認をふまえて、4章、5章でとりあげた前作と比較し、新たな史料を以て18世紀末以降の内容の充実が図られたことを指摘する。

第7章では、かつて『ワチラヤーン』誌に掲載された「ポンサーワダーン・ラーオ・チェン」の復刻出版を検討する。1917年、タイ歴史学の父として広く知られるダムロン親王は、これを『プラチュム・ポンサーワダーン』（『史料集成』）第5部に収めて出版した。ダムロンの経歴と歴史叙述の特徴を概観した後、『ワチラヤーン』誌に掲載されたオリジナル版と比較し、英語を削除するなどダムロンによって改編されたことを指摘する。

第8章では、後世の知識人や研究者による『ポンサーワダーン・ヨーノック』の受容に着目する。1920年代後半以降ほとんど言及されなかったこの著作は、1950年代から興隆した北タイの知識人による文化社会運動の中で取り上げられるようになり、さらにラーンナー史に関する主要な教科書となり、今日も研究者の間で参照される様子が明らかにされる。

最後に第9章で以上の議論を要約する。1880年代末から1907年に執筆・刊行されたチェムの北部地方の歴史に関する著作が、それぞれの時期における北部地方をめぐる政治状況と呼応していたさまを整理し、また20世紀における『ポンサーワダーン・ヨーノック』に対する関心の変化を指摘する。そして、多様な史料を統合し、中国やインド・中央アジアにタイ系の人々のルーツを見出すなど、新たな歴史の枠組みを提示したチェムの先駆性を指摘してしめくくる。

(論文審査の結果の要旨)

プレイヤー・プラチャーキットコーラチャック (本名チェム) が著した『ポンサーワダーン・ヨーノック』は、1907年に刊行された400ページを超える大著である。バンコクやアユタヤーを中心とする歴史叙述が主流のタイにおいて、チェンマイを中心とする北方のタイ系の人々の歴史を描いた書として異彩を放ち、20世紀初めに刊行されて以来版を重ね、多くの人々に親しまれ、研究者にも利用されてきた基本書でもある。本論文はこの『ポンサーワダーン・ヨーノック』を歴史の文脈に置いて、その内容と成り立ちを包括的に検討する。本書に先立ち1880年代末以降チェムが執筆した北部地方の歴史に関する著作を丹念に調べ、それらの著作が成立した時期の政治状況と照らし合わせ、さらにそれぞれの内容、依拠した史料、叙述の枠組みや射程などについて比較検討することにより、『ポンサーワダーン・ヨーノック』に結実するチェムの著作の展開過程と特徴を明らかにしている。また、チェムの死後、『ポンサーワダーン・ヨーノック』がタイの知識人や歴史研究者にいかに関心を受けとめられてきたのかも検討し、今日広く知られる本書が、出版後一貫して参照されたわけではなく、バンコクとチェンマイにおける政治・社会状況の変化の中で、その位置づけも変化してきたことを指摘している。北部地方の歴史を描くチェムの著作を検討する本論文は、関心が「タイ歴史学の父」として称揚されるダムロン親王の著作に偏りがちな近代タイ歴史叙述研究に対しても貴重な貢献となっている。とりわけ次の点について新たな視点や知見を提供している。

第1に、『ポンサーワダーン・ヨーノック』について、本書のみならず、本書の刊行に先立ちチェムが著した関連著作を網羅的に調査し、その誕生過程を詳細に検討している点である。とくに、未公刊文書としてタイ国立公文書館に所蔵される「トン・タムナーン・ウタイ」は、これまで利用されることがなかったチェムの著作であり、『ポンサーワダーン・ヨーノック』に至るその後の著作活動を理解するうえで重要な発見である。そして「トン・タムナーン・ウタイ」の内容を検討する中から、当初よりチェムが、イギリスの植民地官僚の著作や現地地で収集した写本など多様な史料を参照していたことや、紀元前に遡り、中国やインド・中央アジアにタイ系の人々の起源をみだし、その移住の歴史を描いていたことなどを明らかにしており、19世紀末のシャム知識人の歴史観を解明するうえでも、貴重な貢献として特筆される。

第2に、イギリスの外交史料およびタイ国立公文書館に所蔵される外交史料や内務省の史料を渉猟し検討することにより、チェムの著作が、1880年代半ば以降の英仏植民地勢力の進出、それに対応したシャム政府の北部地方に対する政策、そしてその政策と密接に関係したチェムの官僚としての経歴と呼応しながら成立したことを明らかにしている。例えば、英領ビルマとの境界域の調査現場からバンコクに送られたチェムの報告書を紐解き、チェムがこの地域の人々の言葉、文字、歴史を学ぶ重要性を自覚し、歴史に

関する写本を収集していたことも指摘するなど、著作の成立背景を多面的に考察している。

第3に、それぞれの著作を丁寧に読み込み、相互に比較して類似点・相違点を検討し、チェムの著作活動の展開と特徴を跡づけている。いずれもタイ系の人々の起源とその移住の歴史という枠組みの下、英語の書籍や現地の写本など多様な史料を利用し、因果関係に注意を払うなどの共通性がみられたが、執筆時期が下るにつれ利用する史料が充実し、『ポンサーワダーン・ヨーノック』においては、18世紀末以降1870年代半ばにかけてランナーがシャムに統合されていく時期の歴史が新たに加わり、北部地方のシャムへの統合が強調されていったことを示している。

第4に『ポンサーワダーン・ヨーノック』を、歴史叙述をめぐる政治の視点から分析し、チェムの没後、現在に至る過程で評価が揺れたさまも明らかにしている。20世紀初頭『ポンサーワダーン・ヨーノック』はダムロン親王により一旦評価されたものの、王朝史を軸とせず、タイ・ナショナリズムにも直接結びつかないこの著作は、1920年代末以降は知識人や歴史研究者から軽視された。それが1950年代以降、教育の機会均等を求めてチェンマイ大学設立をめざす北タイの知識人による文化社会運動の中で再評価された。そして1964年にチェンマイ大学が設立されると地元の歴史を学ぶための教科書として採用され、その後今日までランナー史研究の中で参照され続けることとなった状況を様々な事例を挙げて論じた。

以上、本論文は、タイ史の基本書の一つである『ポンサーワダーン・ヨーノック』を軸に、近代シャムにおける新たな歴史の生成過程とその後の歴史叙述をめぐる政治を綿密に跡づけ、多くの新たな知見を提供する労作であり、タイ史研究への学術的貢献を高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2022年1月7日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。